

## 聖霊に導かれた伝道

使徒言行録8章26～40節  
2021年7月25日  
松田 基子 師

人類に、神様への救いの道を、十字架の贖いに依って開き、天に帰られたイエス・キリストの切なる願いは、御自身に依るこの御救いが、一人でも**多くの人に伝えられる**ことでした。

イエス様の大宣教命令は、

「あなた方は行って全ての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに、父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなた方に命じておいたことを、全て守る様に教えなさい。」  
「全世界に行って全ての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」

でした。

また、イエス様が昇天された時の約束は、使徒言行録1章8節にありますように、

「あなた方の上に聖霊が降るとあなた方は力を受ける。そして、エルサレムばかりではなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

でした。

聖霊降臨によって、イエス・キリストを信じる信仰共同体である教会が誕生しましたが、その始まりと言うのは、イエス様の12弟子を中心に、本国生まれの本国育ち、本国から出たことのない、外の世界である地中海世界のヘレニズム文化に馴染みのない人々で、構成されていました。それが聖霊降臨によって、多くの外地生まれ、外地育ちで、広い地中海世界で生きて来たヘレニストたちが、大勢イエス・キリストを信じて教会員になりました。

互いにイエス・キリストを信じていることでは、一致していましたが、人は誰も自分の生育歴を負っていて、そこで考え、そこで発言し、そこで行動します。本国から出たことのない人たちは、一般的に保守的な考え方でした。一方広い世

界で生きて来た人々は、問題に気付き易く、革新的でした。

教会史最初の殉教者ステファノは、ヘレニストであり、真実の信仰者として、伝統にあぐらをかいて、神様の御心から逸れてしまっている、ユダヤ教を指摘したことによって、彼らの反感をかい、殉教しました。そこから、キリスト者への迫害が激化して行くのですが、その標的は最初、ヘレニストのキリスト者達でした。ステファノと共に教会実務役員に選ばれた7人の中の1人、フィリポも、ヘレニストでした。彼はエルサレムを逃れて、サマリアの町に行きました。保守的なユダヤ人にとっては、サマリア行きは、民族的感情から躊躇させられるところですが、そこはヘレニストのフィリポです。聖霊の導きと、考え方の柔軟さで、イエス様の命令でもあり、さっさとサマリアに向かいました。

彼はサマリアでイエス・キリストを宣べ伝えました。8章6節をみますと、

「群衆は、フィリポの行うしるしを見聞きしていたので、こぞってその話に聞き入った。実際、汚れた霊に取りつかれた多くの人たちからは、その霊が大声で叫びながら出て行き、多くの中風患者や、足の不自由な人もいやしてもらった。町の人々は大変喜んだ。」

とあります。

フィリポによる、多くのサマリア人の救いは、エルサレム教会に聞こえ、ペトロとヨハネがやって来て、聖霊を受けさせました。使徒による聖霊の注ぎは、魔術師シモンが、お金でその力を求めようとして、ペトロに大叱責を受けたということも起こりましたが、サマリア伝道は大成功でした。その後、聖霊は、フィリポを次の御計画に押し出されました。

8章26節で、

「さて、主の天使は、フィリポに、  
『ここをたつて南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け』

と言った。そこは寂しい道である。」

とあります。ガザと言いますのは、地中海沿いの、『海の道』と呼ばれる街道の一中継地で、街道はエジプトに通じています。エルサレムから、エジプトに向かって行くためには、ガザに出て来て、海の道街道を下って行かなければなりません。天使は、そのエルサレムから、ガザへ向かう道へ行くようにと命じました。

エルサレム、そこはユダヤ教徒達が、特にヘレニストのキリスト者を捕らえようと、躍起になっている所です。エルサレムから逃れて来たのに、また、その方向へ戻らなければならないとは、フィリポに不安はなかったのでしょうか。しかし、フィリポはすぐ出かけて行ったのでした。すぐに従う、聖霊の導きには、すぐに従うことが大事です。すぐに従わなかったなら、祝福の出会いを得ることはなかったでしょう。聖霊は双方を出会いへと導かれました。

27節に、

「折りから、エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、帰る途中であった。」

とあります。聖霊はフィリポをこの人物と引き合わせられました。エチオピアと言えば、エジプトよりもっと遠く、エジプトの南に位置します。女王カンダケと言うのは、人名ではなくて、女王の称号です。彼はその女王の全財産を管理していたと言うのですから、力ある高官です。彼は宦官でありました。宦官と言うのは、信頼に足る腹心で、侍従長の役柄ですが、その役柄上、去勢している場合もあったそうです。

そのような遠くの、高い位の高官が、何故エルサレムの神殿までも、礼拝に来たのでしょうか。28節を見ますと、

「彼は馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。」

とあります。その聖書は、ギリシャ語の聖書でした。当時の地中海世界は、ローマの一大帝国

が広がっていました。参千年続いたエジプトの王朝も、遂に紀元前三十年には滅び、ローマ領となりました。ところで、エジプトの地中海沿岸の都市、アレクサンドリアは、地中海貿易の中心であり、また、文化の中心として、帝国第2の大都市となりました。エジプトとイスラエルは、昔から深い関係がありましたが、アレクサンドリアには、沢山のイスラエルの離散の民、ディアスポラが住んでいました。

イスラエルの民は、どこに行っても選民の自覚を持ち、律法を重んじました。親達はヘブライ語で、聖書を学んでいましたが、3世、4世となると、ヘブライ語が話せない、解らない世代が増えて来ました。そこで紀元前3世紀中頃に、地中海世界の公用語、コイネーギリシャ語で、律法が翻訳されました。以後百年位を要して、旧約聖書全体が訳されました。70人訳と呼ばれる最初のギリシャ語訳聖書が生まれました。

この聖書が出来たことによって、ギリシャ語圏の外国の人々も、聖書を読みたい人は、読めるようになりました。真理を求める人々は、聖書を読み、創造主なる神様への信仰を抱き、外国人でもエルサレム神殿まで巡礼に行く人々が起こりました。ローマ帝国の拡大、道路網の整備、公用ギリシャ語の普及は、後々キリスト教の伝播を、大いに助けますが、早ここに、その第一号が現れたのです。

エチオピアはエジプトの南に位置し、アレクサンドリアの哲学や、学問、色々な教えが、商業の往来と共に入って来ました。その中にギリシャ語聖書も、もたらされたのです。カンダケの高官は教養、品格、精神など全てに揃っていたでしょう。外国人ながら、聖書を読み、その真理に触れると、エルサレム神殿まで巡礼に行かずにはいられないほど、真理に飢え渴いていました。

彼は、帰りの馬車の中でも、大きな声で聖書を読み続けていました。神様はその彼の飢え

渴きに応えようと、ギリシャ語に精通したヘレニストのフィリポを、彼のもとに引き寄せられたのです。29節を見ますと、

「“霊”がフィリポに、  
『追いかけて、あの馬車と一緒にいけ』  
と言った。フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、  
『読んでいることがお分かりになりますか』  
と言った。宦官は、  
『手引きしてくれる人がなければ、  
どうして分かりましょう』  
と言い、馬車に乗ってそばに座るようにフィリポに頼んだ。」

とあります。

フィリポは、天使から、  
「エルサレムからガザへ下る道に行け」  
と命じられた意味が、やっと分かりました。神様は聖霊を通し、私たちを色々なところに導かれますが、その初めは、私たちに納得のいくものではありません。

『何故こんな事を、私がしなければ  
ならないのだろうか。』  
と思える様な命令です。しかし、そこで、求められることは、聖霊に従うかどうかです。イエス様も、ヨハネ福音書13章7節で、

「わたしのしていることは、今あなたには  
分かるまいが、後で、分かるようになる。」  
と言われました。信仰とは神様への信頼です。神様の最善を信じて、従って行く先に、神様の導きの確かさと、素晴らしさが明らかになります。

この、エチオピアの宦官を、キリストの福音に導けるのは、フィリポしかいませんでした。フィリポは馬車に乗り込んで、宦官が今朗読していた箇所を見ました。それは、70人訳ギリシャ語聖書、イザヤ書53章7、8節の言葉でした。私たちが今使っています新共同訳聖書の同じ箇所とは、少し言葉が違いますが、内容は同じです。32節に、

「彼は、羊のように屠殺場に引かれて行った。

毛を刈る者の前で黙している子羊のように、口を開かない。卑しめられて、その裁きも行われなかった。だれが、その子孫について語れるだろう。彼の命は地上から取り去られるからだ。」

宦官はこの箇所の意味が分かりませんでした。

そこで彼はフィリポに尋ねました。  
「どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。」

イザヤ書53章の苦難の僕と呼ばれた人物ほど、イエス様が、人類のすべての罪を一身に引き受けて、神様に人類を執り成して下さった姿を、前もって示した人物はいません。イエス様は、ご自身が人類の罪の身代わりに、十字架に架からなければ、人類に救いの道は開かれないことをご存知でした。ですから、ゲツセマネの園で、捕縛に来た者たちから、逃げることをなさらず、不当な裁判に抗弁される事も無く、十字架上から、一言の恨み言も聞かれず、ただ、人々の罪の赦しを求められ、**神様から捨てられるべき、人類に代わって、神様から捨てられて、十字架に命を奪われました。**

フィリポは、宦官に対して、救い主メシアは、何故そのような苦しみを負わなければならなかったのか、それは、**人類の罪の贖い**のためであったこと、神様はそのことを、第2イザヤと呼ばれた、苦難の僕の姿を通して、**真のメシア救い主の姿を、預言させておられたこと**、そして、その真のメシアは、ナザレのイエス様、あの**十字架に架かれたイエス様であったこと**、イエス様は、罪無き神の御子として、この世に人として生まれ、十字架に、人類の罪を贖われたこと、神様は**贖いを受け入れ**、イエス様によって罪の赦しを与える証明に、イエス様を十字架の死から、**3日目に復活させられたこと**、40日に亘って弟子達に現れ、神の国について教え、昇天され、**神の右の座に着かれたこと**を、熱心に語ったのでした。

宦官は、フィリポの語る言葉に、吸い寄せられ、心は熱く燃え、イエス様こそ、神の子、真の救い主であることを確信して信じました。

36節を見ますと、

「道を進んで行くうちに、彼らは水のある所に  
来た。宦官は言った。

『ここに水があります。洗礼を受けるのに、  
何か妨げがあるでしょうか。』

宦官は心の内に、喜びが湧き溢れ、洗礼を受けないではいられませんでした。ここに、**洗礼の根本**が記されています。

『イエス様を神の子、自分の救い主と信じ、  
自分の存在をイエス様に委ねる事』

です。

フィリポと宦官は2人とも、水の中に入って行き、フィリポは、宦官に洗礼を授けたのでした。

「彼らが水の中からあがると、主の霊がフィリポを連れ去った。」

とあります。どの様にして、その様な事が起こったのか、私たちの知る所ではありません。何れにしても、フィリポは、エチオピアの宦官に付いてエチオピアに行く事は出来ません。フィリポにはフィリポに与えられた使命があります。しかし、宦官は最早、フィリポが側にいなくても、喜びに溢れました。聖霊が共に居られ、御言葉を通して彼を教え、導いてくださることが分かったのです。彼はこれから、エチオピアの人々に、イエス・キリストの福音を伝える器となるのです。

「宦官は最早フィリポの姿を見なかったが、  
喜びに溢れて旅を続けた。」

とあります。

聖霊は、イエス様の言葉通り、ユダヤ、サマリアを越えて、地の果て迄、福音が伝わる様に、弟子達を導き、働いておられました。ここに最初の異邦人伝道が、ヘレニストのフィリポによって行われました。フィリポもまた、聖霊が、カンダケの高官に会わせて、福音を語らせてくださったことに感謝し、カイサリアに向かいました。帰る道すがら、全ての町を巡りながら、福音を上げ知らせたのでした。

聖霊は一人でも多くの人を、イエス・キリストの福音に導きたいと、誰よりも願っておられ、私たちが御心のままに、出会いに導かれます。

今日、人々の心は愈々(いよいよ)固く、伝道が難しく思われます。聖霊の導きと助けなくして、伝道は出来ません。私たちは聖霊の導きを感じる程に、もっともっと静まり、祈り、御心を聞き取って、聖霊に導かれる伝道を、体験させて頂くようではありませんか。

お祈りを致します。

恵み深い天の父なる神様

ご聖霊は私たちを用いて、一人でも多くの人に、イエス・キリストの福音が伝わるようにと、導き働いて下さっています。

それなのに、私たちは何時も

「チョット待って下さい」

と躊躇しています。

どうか、私たちの心を、キリストの愛で燃え立たせ、聖霊の導きを敏感に感じ取る、霊性を与えて下さい。

そして、聖霊に押し出されて、福音を語る者と成させて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの  
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。